

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「よい子」って誰？：
政策ニュース映画のナレーション表現に関する研究
の一環として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): Kawasaki Movie Archive 作成者: 春木, 良且, 田中, 弥生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001669

「よい子」って誰？ —政策ニュース映画のナレーション表現に関する研究の一環として—

春木 良且(フェリス学院大学 国際交流学部)[†]

田中 弥生(東京大学大学院 総合文化研究科)

Who is a 'YOI-KO'? As a Part of the Research on Narration Representation of Municipal Newsreel

Yoshikatsu Haruki (Ferris University)[†]

Yayoi Tanaka (University of Tokyo)

要旨

本研究では、昭和 20 年代後半から 30 年代に掛けて、各自治体で制作された、地域の復興を記録した行政映画(政策ニュース映画)のうち、神奈川県川崎市分を取り上げる。ニュース映画は、主に映像とナレーションから構成されているが、ここではナレーション中で、特に地域の子供を表現するときに多用される「よい子」という表現に着目した。テーマによって、全くその表現が使われないものも多く存在する。どういう子供が「よい子」なのか、よい子ではない子はなぜ、よい子とは呼ばれないのか、コンテンツとナレーションの相関から傾向を洗い出していく。

1. 政策ニュース映画の概要とナレーションの意義

1.1 政策ニュース映画とは

テレビが一般化する以前、映画媒体によってニュースが製作され、映画館などで本編の上映前などに流されていた。戦後になって、主に復興の記録として、様々な制作主体によって盛んに製作されたが、特に各自治体によって地域の広報としてつくられたものを、「政策ニュース映画(municipal newsreel)」と総称する。

政策ニュース映画は、主に昭和 27(1952)年のサンフランシスコ講和条約の発効前後から製作され始めており、昭和 30 年代後半から 40 年代に掛けて、東京オリンピック前後あたりが全盛期だったと言えるだろう。テレビの普及によって、映画が完全に娯楽のものとなって、報道の役割を失ってから、ニュース映画自体は衰退して行った。政策ニュースも、それに合わせるように、自治体のテレビ番組や Web ニュース等に移行して行った。尚、現在見る事が出来る、戦後最初期のものは、昭和 23(1948)年度の茨城県政ニュースであり、最後のものは、平成 19(2007)年の神奈川県のものである。

製作主体は、広域普通地方公共団体(都道府県)単位のものが多く、基礎的地方公共団体(主に市区)レベルでは、県単位で作成されたものの一環として、管理されているものと、市レベルで独自に製作されたものがある。市区レベルの全体像は把握できなかったが、現在ネット等で公開されているもので言えば、神奈川県横浜市、川崎市、山形県山形市、愛知県一宮市、刈谷市、岡山県岡山市、静岡県浜松市などのものがある。どちらも県単位での製作がなされていた地域であり、神奈川、岡山、静岡などでは、製作会社も同じである。また愛知県一宮市、刈谷市は、県とは別に独自に製作している。また東京都の特別区でも、杉並区や台東区、練馬区で作成された記録がある。

[†] haruki@ferris.ac.jp

図1には、各地域の政策ニュース映画保存概況を示すが、戦争時に空襲被害が激しかった地域に、多くの記録が残されているという点から、当初は復興の記録としての性格が強かったことが推定される。

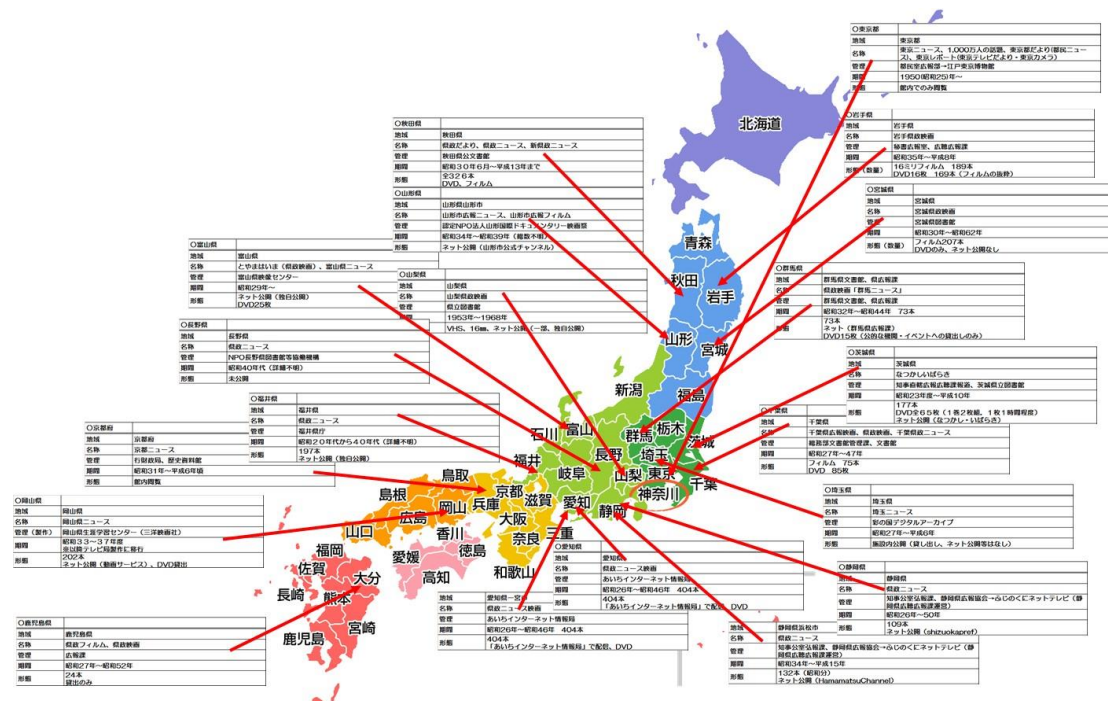


図 1 政策ニュース映画保存概況

これらの政策ニュース映画は、多く複写されて配布され、映画館や公民館などで上映された。しかし公文書ではなく行政刊行物の一種として扱われており、管理規定が明確でない等の理由から、散逸してしまったものが多々ある。また現存するものも、媒体フィルムの劣化やデジタル処理がなされていないなど、史料管理として問題を抱えているものも多い。

その存在自体が殆ど知られていないために、政策ニュース映画に関する研究は、殆どなされていないのが現状である。政策ニュース映画に記録されているものは、高度成長期を挟んだ、日本が大きく変化を遂げてきた時代の、地域の姿や市民生活などであり、公文書と個人の記録の間を繋ぐ、ミッシングリンクのような存在であると言えよう。

報告者らは、神奈川ニュース映画協会が作成し公開した神奈川県政ニュース映画のうち、川崎市の委託によるものについて、昭和 27 年から平成 19 年までの全 719 本を分析する機会を得た¹。神奈川県では、社団法人神奈川ニュース映画協会という団体によって、昭和 26(1951)年頃から、横浜、川崎、厚木などの県内諸地域の復興が記録されて行った。同団体は、昭和 25(1950)年に設立され、神奈川県や、横浜市、川崎市など、県内の公共団体の施策と事業を PR するニュース映画や記録映画、教育映画などを数多く製作してきたが、平成 19(2007)年に役割を終え解散している。正式な記録はないが、最後に映画館で流されたニュース映画は、この神奈川ニュース映画協会のものだと言われている。

神奈川ニュース映画協会の解散にともない、多くのニュース映画が、横浜市、川崎市に移管された。川崎市の委託による分は、川崎市民ミュージアムがデジタル化等を行い、権利処理等も終えて、

1 本数は、計 719 件（ニュース No.29～1347）、1 件あたり約 100 秒（30 秒～119 秒）。合計再生時間：19 時間 30 分 34 秒。

現在は川崎市市民文化局が管理を行っている。また各映像は、「川崎市映像アーカイブ」としてYouTube等で公開されており、市政関係イベントの素材としても利用されている。

これら市政ニュース映画は、昭和戦後史を記録した貴重な資料ではあるが、主に川崎市の政策内容を説明するもので、余り一般に訴求するものではない。特に、高度経済成長前の昭和20年代の動画は、衛生観念や人権意識などが大きく異なった時代のものでもあり、現代の感覚からは不愉快な映像や表現、題材も含まれている。

しかし、港湾部の発展やインフラの整備に合わせ、都市部へ人口が集中し、産業集積が進むことで、日本の工業技術を支えた京浜工業地帯が成立していくプロセスが記録されているという意味で、他の自治体には類を見ないほど重要な史料である。市政を記録したニュース映画は、この時代の地域や社会変化を捉えるための恰好の素材であり、敗戦後から高度成長期に至る産業資本主義社会の成立プロセスをうかがい知ることができる。既に戦後70年以上、高度成長期から60年が過ぎた現在では、ここに記録された市民の暮らしは、十分に民俗学的な関心の対象であり、都市部における経済発展をトリガーとした、産業民俗学的な観点から分析を行っている。

1.2 市政ニュース映画の構成

前述のように、政策ニュース映画は、各広域自治体で製作されたが、地域や年代によって若干の違いがあるものの、1つのテーマに関して1, 2分程度に完結したニュースが、複数本集まって1本となり、一回に上映された。全体では概ね、10分から15分ほどの長さで、映画館では、新聞社系の制作会社による全国版のニュース映画などと併映されたようである。

川崎市政ニュース映画は、この1テーマごとに分割してデジタル化、管理されている。各ニュースは、タイトル画面のあとすぐ本編が始まり、ナレーションによって進行する。ニュース映画に含まれている情報は、映像そのものと、言語情報の2種類である。各ニュースには、それぞれタイトルがついているが、映像サイズが昭和36年分からビスタ化されて以降、タイトルが縦書きから横書きになり、若干文字数が多くなる傾向にある。言語情報としては他に、コンテンツ中に含まれるものとして、ナレーション、テロップ、さらに被写体中の看板や貼り紙など、いわゆる文字景観などが含まれる。ナレーション以外の音声は、基本的にBGMや実況音だけであり、音声情報としては市長の発言などごくわずかである。その基本的な構成は、最後まで変わらない。若干のテロップが付加するものもあるが、政党や設備の固有名などごくわずかである。また短時間に多くの内容を扱っているので、通常の映画やドキュメンタリーよりはシーンの転換やコマ割りがかなり細かいのが特徴である。そのため、映像に対してかなり多くのナレーションが付加されている。

図2には、報告者の作成による動画の構成表例を示す。昭和27年7月24日付の「川崎市政28周年」と題されたもので、30秒程度のものである。川崎市政ニュース映画の中でもごく初期のもので、オープニングを含めて八つほどのシーンから構成されており、各々が2, 3秒で目まぐるしく移り変わる。初期のものは、総時間が短く、ナレーションも比較的少ないものが多いが、本ニュースも、80文字ほどで、全動画の中で最も少ない。

ニュース映画という性格上、映像化されているものに対しては、ほぼシーン毎にナレーションが付加されている。昭和2, 30年代のものは、被写対象の変化が激しいことに加え、映像自体が劣化していることもあり、このナレーションが動画の分析においては重要な情報源となっている。本ニュース映画に関しては、川崎市民ミュージアムによって、ナレーションの書き起こしが行われている。

メタ情報

ニュースタイトル	川崎市制28周年	※川崎市データより
公開日	昭和27年07月24日	※川崎市データより
ファイル名		
目録番号	S27-3	※年度-通し番号
時間	000030	※[h]:mm:ss

コンテンツ情報

場所	全区	※川崎市データより
題名・キーワード	市庁舎	※川崎市データより

構成表










NO	カット	カット映像	タイム	コメント・ナレーション	スーパー	コンテンツ	タグ
1	オープニング				川崎市政二十八周年 川崎		商店街
2	トロリーバス		000004				旧市庁舎 トロリーバス
3	工業地タオ		000006	市政28周年を迎えた川崎市では、7月1日その記念行事を行いました。			京浜工業地帯
4	川崎競輪		000009				競輪 川崎競輪
						川崎競輪場	
5	川崎球場		000013	人口37万、無軌道電車も走る、スマートな港湾都市としての、目覚ましい発展ぶりを、喜び合う一日でした。			野球 川崎球場
6	不明		000016				
7	市庁舎パレード		000019				旧市庁舎 ボーイスカウト
8	エンド		000030				花火大会

図 2 構成表例

春木他(2017)では、このナレーションに着目し、ニュース映像のコンテンツ分析を試みた。このように、市政ニュース映画においては、ナレーションを中心とした言語表現は、映像表現の説明情報、あるいはメタ情報として機能しており、コーパス化することで、動画に対するタグとして機能させることも可能であると考えられる。本研究では、言語情報に着目することで、動画の分析を試み、被写体となっている当時の社会状況の理解を目指している(図3)。

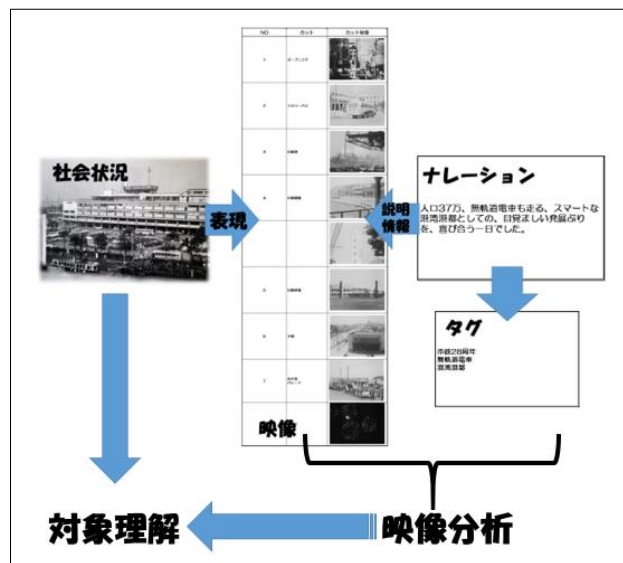


図 3 映像分析と対象理解

2. 政策ニュース映画とコンテンツ

2.1 行政課題としての社会的弱者

政策ニュース映画は、地域の行政施策の記録でもあり、高齢者や障害者、さらに子供などに対する教育、福祉系の政策は重要なテーマとしてしばしば取り上げられている。川崎市の場合、工業地帯として発展してきたことや、長く環境汚染などの問題を抱えてきたことなどから、経済至上主義的な印象があり、福祉行政のイメージが希薄なのは否定できない。しかし、ことこの市政ニュース映画を見る限り、他の地域よりはるかにきめ細かく、社会福祉等への対処がなされて来ていることがわかる。

川崎市は、昭和 20 年代には数多く存在していた、失業者やいわゆる戦争未亡人などに向けた失対事業や、授産所、障害者施設、老人施設など、さらに障害者教育、また集団就職などで都市部に移住してきた青少年などに対する成人教育など、いわゆる社会的弱者等に対して、意外なほど、ハード、ソフトを合わせた施策を行ってきたということが、政策ニュース映画を通して得た、新たな発見であった。

本研究では、それらの中で、特に子供についてフォーカスを当てる。教育や社会福祉を中心とした子供に対する施策は行政側としても大きな関心があるため、政策ニュース映画の題材として、子供は特に多く取り上げられている題材である。

子供に関しては、まず前提として、団塊の世代を中心とした、戦後のベビーブームの結果としての子供人口の多さを指摘する。昭和31(1956)年から始まって行く日本の高度経済成長を下支えた、多くの若手労働者の存在を「人口ボーナス」と総称するが、それらの層が子供時代だった頃の記録が、昭和 20 年代からのニュース映画には残されている。団塊の世代、戦後のベビーブーマーであるこれらの子供たちが、数年後に、労働力人口として、日本の高度成長の後期を支えていくことになる。

例えば、昭和 32 年 7 月 17 日「みんなで体操」には、ラジオ体操のために小学校の校庭に近隣の人々が 5000 人も集まった様子が記録されており、さらに昭和 32 年 5 月 15 日「こどもの日」では、「約2万人の良い子たちが、手に手に日の丸をかざして市内の目抜き通りを行進」などとナレーションと共にその様子が映される(図4)。決してフィクションでは表現できないような、凄まじいばかりの子供の多さを通して、人口ボーナスの実際とその後の高度経済成長の予兆を垣間見ることができ

と言えるだろう。



図 4 人口ボーナス

2.2 こどもの表現

前述のように、ニュース映画の映像に対して、ナレーションは説明情報としての機能を持つため、ナレーションの分析によって、当時の政策の背後にある様々な事情や人々の価値観などを理解することが可能である。ここでは特に、一連のこども関連のニュース映画における、こどもに対する形容表現に着目する。

現代の感覚として、若干違和感を覚える表現に、ニュース映画では多用されている「良い子」「よい子」という呼称がある。主にナレーションとして多用されているが、タイトルとしても以下の 4 本で使われている。

- 1961/5/23 良い子の交通訓練
- 1965/5/25 よい子へのおくりもの
- 1968/8/27 良い子の願い交通安全
- 1969/5/25 よい子へのおくりもの

これらのうち、1965/5/25「よい子へのおくりもの」以外は、すべて交通関係のテーマである。また 1969/5/25「よい子へのおくりもの」は、本編中のナレーションにも「良い子」という表現が使われている。これはおそらく、現代のテレビニュースなどでは、まず聞くことができないような表現だろう。全 717 本中、ナレーション中で用いられている 12 本から、20 か所の用例を KWIC 形式で、表 1 に示す。

表 1「良い子」の KWIC

公開年月	表題	KWIC
1954/1/27	羽根つき大会	豆戦士がにぎやかな観衆の応援に励まされ、羽根を打っての大勝利。良い子
1954/8/18	夏の子供達	また、山あいの清流では…こうして、良い子
1954/9/15	小学校での気象観測	に余念のない児童たちがいます。それは、川崎市の西生田小学校の良い子
1955/8/17	夏二題・林間学校	子供たちにとって夏休みこそ大自然に親しむ絶好の機会と、川崎小学校の良い子
1957/5/15	こどもの日	て、第二会場の市民会館に向かいました。ここでは、日本の良い子
1959/8/25	緑豊かな子供たち	の日を祝う盛沢山の催しが各地で見られ、まず、約2万人の良い子
1961/5/23	良い子の交通訓練	川崎市では図書館のおじさんたちが毎日のように巡回しています。良い子
1965/5/25	よい子へのおくりもの	全校揃って交通訓練に大々参加です。毎週月曜日は、全校800名の良い子
1966/2/22	もうすぐ一年生	このほど、川崎市の産業文化会館で「ママとよい子
1968/8/27	良い子の願い交通安全	ママとよい子の交通安全会館」が開かれました。会場に集まった良い子
1968/10/22	熱意でみつけた児童公園	の注意が大切なことを改めて心に誓い合いました。その後、お母さんと良い子
1971/11/23	わたしはデコちゃん	た。その後、お母さんと良い子の代表が意見を発表しましたが、良い子
		発表しましたが、良い子の代表、ヨナガミミコちゃんは、（声）この良い子
		中、除幕・開園式を行いました。この遊園地は、何とかして良い子
		「デコちゃん号」と命名された機関車の前には、良い子
		なんと、地球を35周もしたのです。こうして開校を遂げた、川崎のよい子

初出は、昭和 29(1964)年であり、昭和49(1971)年が最後であるが、タイトルとして使われている昭和 40(1965)年「よい子へのおくりもの」では、ナレーション中で全く使われていないため、「良い子」という表現は、実質的には昭和 30 年代までだったと考えていいだろう。

さらに用例として特筆すべき点として、1954/5/19「市政の民主化と広報委員会」中で、広報委員会の活動を示す行政関連資料として、「川崎時報」が映るが(図 5)、その見出しに「よい子に正しい●●(不明)を」とあり、行政資料でも使われていたことが推定できる。またその次のシーンに、1954 年 2 号と記載のある「市政グラフ」が映るが、残念ながらこれらも行政関連資料であり、筆者の調査の範囲ではあるが、どちらも発見できなかった。



図 5 川崎時報の見出し

注目されるのは、子供がテーマであるにもかかわらず、「良い子」という形容がなされていないケースが少なからずあるという点である。ナレーション中で、「良い子」「よい子」ではなく、「子供」、「こども」という表現が使われている例は、政策ニュース映画中には非常に多く見受けられる。一体、「良い子」とそうではない「子供」の違いは、どこにあるのだろうか。さらにその分化が生まれる理由はどこにあるのであろうか。

例えば、こどもの日をテーマにした、昭和 28(1953)年 5 月の「子供の日」のナレーション全文は以下である。

「5月5日はこどもの日。今年はいよいよ晴れた五月晴れにこいのぼりの数もぐんと増え、子供たちを中心の催し物が至る所に見られました。この日、川崎市では、家庭に恵まれない孤児たちにもこの喜びを与えようと、市長さんがたくさんのおみやげを持って孤児院を訪れ不幸な子供たちを喜ばせました。また、ある孤児院の子供たちは市長室に招かれ、市長さんから激励の言葉を受けましたが、食べ盛りの子供たちをもっとも感激させたのは、美味しいごちそうのようでした。」

家庭に恵まれない孤児、不幸な子供たちといったストレートな表現があるが、ここでは「良い子」とは表現されていない。

また昭和 33(1958)年 5 月 27 日の「カメラルポ 母子寮」でも子供が登場するが、こちらにも「良

い子」という表現はない。

「疲れて仕事から帰ったあと、内職をしなければならぬ母を助けて炊事の手伝いを
する子供たち。どんなに家庭的に恵まれていなくても、苦しみや寂しさにくじけずいつも明
るく生きてゆく母と子供たちです。」

ここでも「家庭的に恵まれていない」などの形容があるが、単に子供としか表現されていない。昭和 35(1960)年 04 月 26 日「施設の子供たち」でも、共働きや母子寮、いわゆる孤児院が取り上げられているが、やはりそちらにも「良い子」という表現はない。ほかに、聾学校をテーマにした、昭和 29(1954)年 2 月 24 日「聾学校の子供達」でも、「耳が聞こえない不幸な子供達を教育する、川崎市立ろう学校は、昭和26年に誕生して…子供達は楽しく勉強に励んでいます。」と、「良い子」とは表現されていない。

おそらく「良い子」という形容には、何かハンディキャップや様々な事情を抱えていないといった価値観があることが推測される。多分に感覚的な使い分けがなされているようであり、厳密に論理的な区別はできないだろうが、行政関連資料として製作されたものであるがゆえに、言葉の選び方にも、何らかの政策的な意図や判断が含まれていると考えられる。以降には、「良い子」とそうではない「子供」の用例を元に、両者の属性を明らかにする。

表2は、昭和 40 年代までのナレーション中での「子供」の用例を、KWIC 形式で整理したものである。

表 2「子供」の KWIC

公開年月	表題	KWIC
1953/5/21	子供の日	市長さんがたくさんのおみやげを持って孤児院を訪ね不幸な子供たちを喜ばせました。
		また、ある孤児院の子供たちは市長室に招かれ、市長さんから激励の言葉を授けました。
		食べ盛りの子供たちをもっとも感謝させたのは、美味しいごちそうのようでした。
1954/2/24	聾学校の子供達・	耳が聞こえない不幸な子供達を教育する、川崎市立ろう学校は昭和26年に誕生して、
		先生の鬼神にも及ばぬ努力で、子供達は楽しく勉強に励んでいます。
		児童福祉法に基づいて、家庭の都合で十分に面倒を見られぬ子供達も、悪い干渉によって
1955/4/20	保育園の一日	悪い干渉によってその影響が心配される子供達を預かる保育園が、市内の24か所に設けられています。
		ここに預けられた子供たちは、一日の仕事が終わってお母さんが迎えに来るまで、
		お母さんはお母さん役となり、また、お姉さん役となり、毎日、優しく子供達を面倒を見ています。
1955/12/20	計量まつり	こうした保育園には、市内の約1800人もの子供達が預けられています。
		使い古しや壊れたものがたくさん集められて、火にくべられました。そして、子供達は引き換えに新しいものさしをもらって、大喜びでした。
		寮の一日は、子供達に心を残しながら母親が仕事に出勤していくことから始まります。
1958/5/27	カメラ母母子寮	仕事に出勤していくことから始まります。子供達にしてみれば病気になっても看護してくれる母がいなくて、
		内職をしなければならぬ母を助けて炊事の手伝いをする子供達。どんなに家庭的に恵まれていなくても、
		苦しみや寂しさにくじけずいつも明るく生きてゆく母と子供達です。
1958/6/24	カメラろう学校を訪ねて	川崎市では、このほど、上小田中に、耳の不自由な子供達のためのろう学校を新設しました。
		市内本月にある新日本学院を訪ね、親のない気持で子供達と一緒に遊びました。
		1959/10/27 赤い羽根いろいろ
1960/1/26	川崎市に聴覚保育所	最後に訓練院を訪ねました。子供達たちの演奏に胸を打たれそれぞれ大きな感銘を受けるとともに、募金の意義を再認識しました。
		川崎市では、このほど、高津地区の下作延に県下でも初の聴覚者の子供達を専門に預かる聴覚保育所を新設しました。
		約90㎡の建物に満1歳6ヶ月の乳児を含めておよそ40人の子供達を月々100円で預かるというものです。
1960/4/26	施設の子供たち	聴覚が働いている子供達を預かる大崎保育園では、61人の園児が元気で遊んでいます。
		市内の保育園では、子供達を明るく伸び伸びと育てるため、昨年から絵や工作で芸術教育を行っています。
		与えられた道具を使って、子供達にはいろいろなものを作り出します。
1962/4/24	創造する幼児たち	いろいろなものを作り出します。子供達の感情、家庭環境などが、制作態度や作品を通して観察することができます。
		制作態度や作品を通して観察することができます。子供達の生活指導に大いに役立っています。
		東京第二回道沿いにある南河原公園に子供達のための立派な遊び場が誕生しました。
1962/6/26	子供へ3つのおくりもの	外側を船のようにかたどったこの遊び場は、自由な遊び場として、子供達に自由に変化のある遊びができるように、いろいろな工夫が凝らされています。
		自由奔放に遊べるこの遊び場は、早くも子供達の人気を博しています。
		高津地区の聴覚保育所は新しい設備を備えており、子供達に生活指導を受けています。
1963/5/28	楽しく子供遊園会	5月12日、向ヶ丘遊園地を一日子供達に開放して、川崎市子供遊園会が開かれました。
		朝早くから集まった子供達には、絵本やお菓子のプレゼントに大喜び。
		園内は一日中、子供達の明るい笑顔と元気な声があふれていました。
1965/8/24	子らすこやかに	この配本所は、毎週2回、3時から7時まで開かれています。子供達には夏休みの読書、宿題の整理などに役立つと人気を呼んでいます。
		一方、夏休みの子供達の校外指導として、市では、教育委員会と警察とが協力して、
		教育委員会と警察とが協力して、子供達に間違いないよう、夜の街をパトロールしています。
1965/10/26	留守家庭に勉強部屋	繁華街などで遅くまで遊んでいる子供達は早く家に帰るよう指導します。
		こうして子供達が夏休みを健やかに過ごせるよう、愛のバトロールカーは巡回を続けています。
		3時にはおやつも出て、食べ盛りの子供達は大喜び。安心して食べますと、父兄たちにも好評です。
1966/2/22	もうすぐ一年生	児童の身体検査がそれぞれの学校で行われました。健やかに成長した子供達。付き添いのお母さんたちの目が喜びを隠し切れません。

両者の違いを明らかにするために、その用例を、元となっている①ニュース映画のテーマと、②ナレーション語彙の特徴語、③「よい子」「子供」を形容する語、の 3 点から整理した。どのような文脈で、どういう意味合いとして、その言葉が使われるのか、どういう子供たちが良い子となり、またならないのかを明らかにする目的である。

「良い子」に関しては、全 12 件のうち、学校教育、特に小学校での学びに纏わるものが 6 件、公園など地域設備に関するものが 3 件、交通安全教育に関するものが 2 件となっている。

「良い子」ではない「子供」に関しては、抽出した全 15 件のうち、教育をテーマにしたものが 11 件あるが、それらは聾学校、盲学校、養護学校など当時の「特殊教育」、現在の「特別支援教育」にあたるものが殆どであり、孤児院（現児童養護施設）2、聾学校2、保育園2、簡易保育所（現児童福祉施設）などが含まれている。通常の学校教育に関しては 1 件だけだが、テーマとしてはいわゆる鍵っ子を対象とした学内の保育施設（現学童クラブ）に関するものであり、これも特殊教育の文脈のものと言っているだろう。

特徴語に関しては、形態素解析を行ったうえで、「良い子」と「子供」について、特に差異が大きかった語に関して、頻度を求めた。詳細は表3に示すが、ここで見るように、かなり明確に語の頻度に違いが出ている。「良い子」に関しては、友達、先生、全校、大勢、日ごろ、楽しい、訓練、大会、熱意、応援などの語が複数の頻度があったのに対して、「子供」においては、これらは軒並み出現していない。

逆に、「子供」で頻度が高い、母、勉強、家庭、指導、生活、毎日などは、「良い子」では低く、愛、感謝、環境、激励、心配、不幸、母親、さらに、施設、自由、設備、福祉などは、0である。

表 3 「良い子」「子供」での語の頻度

	学校	保育	母	勉強	家庭	指導	獎金	生活	毎日	夏休み	探究	施設	自由	設備	福祉	母子	遊び場	安全	交通	愛	感謝
良い子	9	1	2	1	0	1	0	1	2	5	0	0	0	0	0	0	3	4	6	0	0
子供	13	12	11	7	5	5	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2
	激励	心配	不幸	母親	楽しく	先生	気の毒	共稼ぎ	園芸	市民	会館	公園	廊下	行進	全校	大勢	日ごろ	楽しい	訓練	大会	熱意
良い子	0	0	0	0	1	4	0	0	1	2	4	4	1	2	2	2	2	3	3	3	3
子供	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

最後に、「良い子」「子供」それぞれの形容語であるが、表1で示したように、「良い子」では、「川崎市の西生田小学校の」、「川崎小学校の」、「日本の」、「全校 800 名の」、「市内の」などのように、学校を中心とした特定の組織に所属しているといった属性が示されている。

それに対して、「子供」の場合、「不幸な」、「耳が聞こえない不幸な」、「耳の不自由な」といった障害や、「家庭の都合で十分に面倒を見られぬ」、「悪い干渉によってその影響が心配される」、「親のない気の毒な」、「両親が働いている」、「内職をしなければならない母を助けて炊事の手伝いをする」、「繁華街などで遅くまで遊んでいる」など、家庭、生活環境など、個々の事情に属するような、否定的要因が使われている。中には、「食べ盛りの」という表現もあるが、孤児院や困窮家庭の文脈などで使われているため、食事がままならないような事情を示すような表現であることにも注目される。唯一、肯定的なものとして使われている「健やかに成長した」という表現は、昭和 41（1966）年のもので、既に「良い子」が使われなくなってきた時点のものであり、なおかつ、親から見た子供に対する感情の表現となっているため、他の「子供」に対する形容語とは、若干意味合いが違っていると言えよう。

なおこれらは、この時代の価値観に基づいた表現であり、現代においては、人権等の観点から不適切な表現が含まれていることは付記しておく。

これら一連の「良い子」「こども」にまつわる表現から、大まかに「良い子」の特徴を、属性（デモグラフィック変数）、嗜好、関心など（サイコグラフィック変数）に基づき、抽出すると以下のようになるだろう（図6）。

良い子：

小学校で通常教育を受けている、両親がいる、（共働き家庭）鍵っ子ではない、先生の熱心な指導を受けている、学校では勉学のほかに、課外活動に勤しんでいる、全校の行事や市主催の行事

には積極的に参加する、夏休みの林間学校などを楽しんでいる、交通安全が一番気になっている



図 6 良い子の属性

これに対して、「良い子」ではない「子供」は、障害を持つ、鍵っ子、日雇い労務者の親、十分に面倒を見てもらえない、貧困である、繁華街などで夜遅くまで過ごす、日々の生活が関心事項であるなど、「良い子」とは全く異なった属性を持つ姿が示されている。

特に、前述のように、母、家庭、さらに生活、毎日という語が頻出しているのに加え、愛、感謝、激励、心配、不幸など、学業より日々の生活そのものが関心事項であることが推測される。また「良い子」での頻出語である、友達、先生、全校といった語が含まれないので、「良い子」が存在する場所である学校とは違った場所での日常が想定されている(図7)。



図 7 「良い子」ではない子供の属性

3. ペルソナとしての「良い子」

このように、属性から見ていくと、「良い子」の像は明確であり、その像に適合しない属性を持った子供たちが、「良い子」とは表現されなかったものと結論付けられるであろう。そのため、「良い子」ではない「子供」の属性は、社会関係や個人のもの、環境など様々な観点からのものが含まれており、一概にその姿を定義することは難しい。

そもそも政策ニュース映画は、行政側による、政策の遂行結果の広報と、これからの施策に関する

る問題提起の、大きく2つの目的を持っている。昭和 20 年代は、主に復興に向けた前者が中心だったが、復興の達成とともに、経済成長に政策的な関心が移行して行き、後者が重要になって行く。すなわち、行政課題を可視化することで、市民の理解を得るという目的で政策ニュース映画が作成されるようになっていったわけである。例えば、戦災の影響による具体的な施設の処理に纏わる最後のニュースは、川崎大空襲による被害を受けた、川崎市消防署の建て替えを取り上げた、昭和 31(1956)年 3 月 21 日「望楼にニュー・スタイル」が最後である。以降、戦争に関しては、慰霊祭が取り上げられる程度となっていく。

前述のように、昭和 2, 30 年代は、戦後のベビーブーマーを中心とした、子供に対する施策が、重要な政策課題となっていた。当時の出生率と幼児死亡数を見ると、高い確率で子供の死亡があったし、昭和 20 年代では、未だ戦災孤児などの問題もあったはずであり、事情を抱えてない子供のほうが少ない状況だったと言えよう。特に政策的な観点から言えば、子供に対しては教育と、社会福祉と2つの観点からの施策が考えられる。そうした環境下で、「良い子」と表現される子供の姿は、あくまでも教育行政の対象であって、福祉行政の対象ではない。言い換えると、「良い子」ではない子供は、こと政策ニュース映画で取り上げられること自体が、何らかの課題を抱えているため、どちらかと言えば、福祉行政の対象だと言えるのではないだろうか。

川崎市は、集団就職などで工業地帯に流入してきた若年労働者に対し、いち早く成人学校を開講するなど、教育、福祉行政に対しては、先進的で熱心な地域である。こうした多くの行政課題の中で、通常の学校教育を受けている、福祉行政の対象となるような問題を抱えていない層が「良い子」と総称されているとするならば、それは行政活動における、ある種の「ペルソナ」として捉えることもできるのではないだろうか。それによって、それ以外の子供たちが抱えている課題などを強調するといった、広報、広聴上の効果があると言える。

近年、政策課題を市民レベルで検討するために、マーケティングの領域で多用されていたペルソナを用いることが、しばしば試みられるようになってきている。特にシビックテックの文脈などで、ICT やオープンデータなどの活用と共にデザイン志向の一つの試みとして行われることが多々ある。

こうした一連の動きの先駆的なものとして、この政策ニュース映画における子供や老人などの描かれ方を捉えることも可能ではないだろうか。その意味では、政策ニュース映画は単なる市民に対する広報手段だけではなく、行政側の自己評価や目標設定として、さらに市民からの広聴事項としても機能していたのではないかと推定される。「良い子」とは、政策側から見た、子供のペルソナの一つであった、本稿ではそのように結論付ける(図8)。

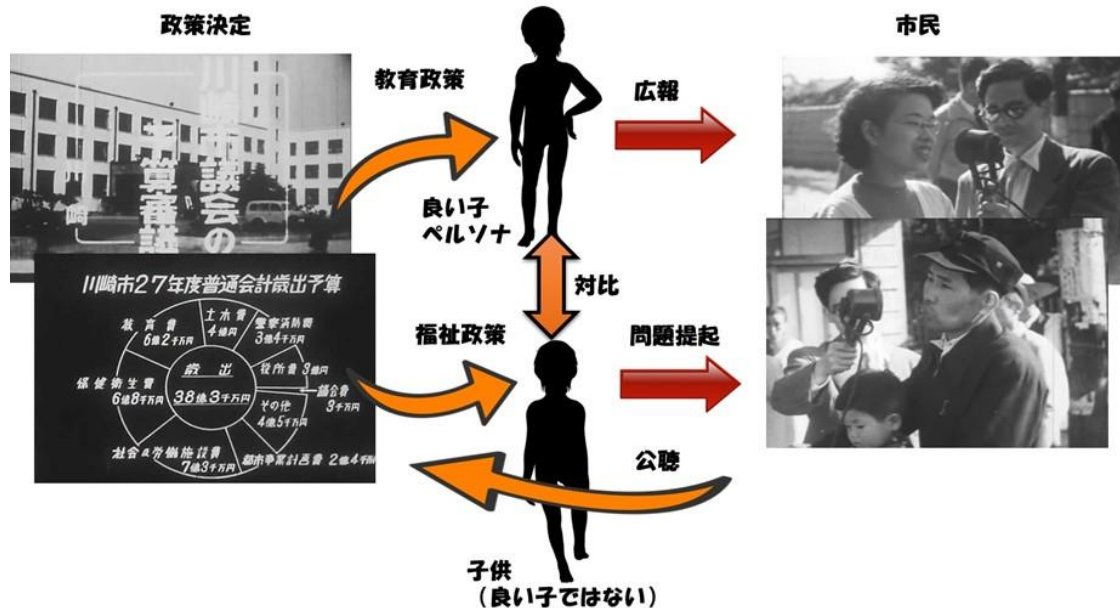


図 8 ペルソナとしての「良い子」と政策の広報、広聴

こうした政策課題を、ニュース映画中において、ある種のペルソナ的な存在を設定して可視化し、強調しながら問題提起をしていったものの例には、この他に老人の問題も指摘できる。老人の問題は、戦前は家制度を前提とした相続制度による家督相続者が担うものとされたが、戦後、家制度が廃止され、家督相続が均分相続に変わったことから、老人は「扶養」すべき存在になり、社会共通の関心事項となって行く。

昭和 28 年 09 月 16 日の「老人の楽園」は、養老院の開設に関するニュースであるが、「溝口に新設された川崎市立養老院は恵楽園と名付けられ、身寄りのない老人を収容しています。」とのナレーションが入る。「身寄りのない」という属性が強調されているが、これは家督を含む概念である、戦前の老人対策を継承した、老人像であると言える。この時点では、老人政策は、この「身寄りのない老人」に向けたものだったと言える。

昭和 34(1959)年に国民年金法が制定され、同年 4 月からの老人福祉年金の支給が開始する。ここから、老人は「家」ではなく、政策上の課題となって行く。昭和 33 年 09 月 23 日「としよりの日」では、「お寿司屋さんが腕によりをかけてのプレゼント。恵まれぬ100名のお年寄りたちは大喜び。」となり属性が「恵まれぬ」という形で抽象度が上がっている。ここでは、「身寄り」以外に経済面なども含んだ属性で政策対象の老人が規定されており、老人政策の変化が読み取れる。

以降、昭和 36(1961)年 4 月に軽費老人ホーム国庫補助が認められ、また昭和 38(1963)年には老人福祉法が制定される。これによって、老人福祉施設として、生活保護法の養老院を継承した養護老人ホーム、特別養護老人ホーム、そして軽費老人ホームが認められるようになって行く。この高齢者週間を取り上げたニュース映画は、以降、これを入れて 7 本製作されるが、そのいずれにも、老人を形容する語句は付加しない。

昭和 35 年 09 月 27 日 としよりの日

昭和 36 年 09 月 26 日 としよりの日

昭和 38 年 09 月 24 日 としよりの日

昭和 40 年 09 月 28 日 としよりの日

昭和 42 年 09 月 26 日 いつまでもお元気で-敬老の日ー

昭和 45 年 09 月 22 日 敬老の日

この時点において、政策の対象となるべき老人は、「身寄りのない」→「恵まれない」といった条件から、すべての「老人」へと変化していったと言えるであろう。

人口問題研究所の指摘によると、人口の高齢化が社会的に認識され始めたのは、1960 年代半ば以降のことで、1968(昭和 43)年 9 月の国民生活審議会の「深刻化するこれからの老人問題」は、年金、福祉、保健、就労、住宅対策をあげた。同月、全国社会福祉協議会は、「居宅ねたきり老人実態調査」を発表した。これを契機として、「ねたきり老人問題が社会問題となり、脳卒中などの医療対策と介護問題が課題となった。」とある。昭和 47(1972)年の中央社会福祉審議会老人福祉専門分科会による、「老人ホームのあり方に関する中間意見」での、「老人ホームを「収容の場」から「生活の場」へと転換させる必要性の指摘」は、ここにおいて家制度が完全に終了した。こうした一連の老人政策の変化は、ニュース映画で記述、表現されている老人像と明確に対応するものである。

政策ニュース映画は、広報としての役割が中心ではあったが、特に行政側が認識をしている行政課題を記述したものという側面もある。「良い子」とは、それを可視化するための、政策的なペルソナとして生み出されたものであるとするならば、老人の例で見ると、様々な政策課題において、対象の言語化、可視化をするといった手法は多用されたものと思われる。政策ニュース映画研究における、ナレーションの語彙分析の役割は決して小さくないということが、改めて明らかになったことを付記しておく。

謝 辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」によるものである。また、政策ニュース映画の概況調査は、平成 29 年度放送文化基金助成事業の一環として行った。

文 献

春木 良且・田中 弥生・田村 寛之(2017)「川崎市市政ニュース映画のナレーション分析を用いた映像理解の試み：市民アーカイブズ構築のための枠組みとして」『言語資源活用ワークショップ発表論文集 2』, pp.239-251.

国民生活審議会調査部会老人問題小委員会 (著), 経済企画庁国民生活局 (編) (1968)「深刻化するこれからの老人問題—国民生活審議会調査部会老人問題小委員会報告 (1968 年)」

中央社会福祉審議会老人福祉専門分科会「老人ホームのあり方に関する中間意見」(1972)

<http://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryou/no.13/data/shiryou/syakai/fukushi/66.pdf>

人口問題研究所「ワーキングペーパー」 http://www.ipss.go.jp/pr-ad/j/soshiki/ipss_j2017.pdf

関連 URL

川崎市映像アーカイブ

<https://www.kawasaki-movie-archive.com/>

『政策ニュース映画研究』

<https://www.facebook.com/municipalnews/>

